

第二詩集

立
脚
点

だめじよみ

ミカヅキカゲリ

も

く

じ

火星を想う

幻の惑星ネム

艶うるはばあちゃんの死

むらさきいろ

血縁

江戸っ子

こなごなれいわ

動物園

よる、どうぶつ

まだわたしにも

奪われた

まき子が好き

山芋鉄板

06

10

12

14

18

22

26

28

30

32

33

34

36

14

〈産みたて氷〉

42

15

まんぼうメンタル

44

16

サバイバー

46

17

夜の点滅信号

48

18

はじめての眸まぶた

50

19

憧憬

52

20

白秋の縁ゆかり

54

21

忘れもの

56

22

少女の花畑

60

23

旅立つきみへ

64

24

ひとりきり

68

あとがき

74

略歴

78

■ ■ ■ 十日月少女革命 ■ ■ ■ のススメ ■ ■ ■

80

■ ■ ■ 既刊リスト ■ ■ ■

81



「火星を想う」

だからわたしは思うのだ。

『介助者と暮らすことは、
隔たった火星を想うこと』

であると。

繰り返し繰り返し、自分に云い聞かせるみたいにして。

なぜ火星なのか？

わたしにもっともらかしい天体は、
名前にもあるとお月である。

とおい天体はあろうことか太陽。

強さを振り翳し、弱いものや歪んだものを許さないで灼き尽くすような
威張ったところが厭きらい。

だけど、わたしひとりきりなら、
月に牽かれるけれど、

介助者と暮らすことは、
なぜか、火星を想うこと。

闘いの星だからか、
地球にたまたま近づいてくる不穏ゆえさ故か。

わたしは今日も、
料理を作ってもらいながら、
或いは、お風呂でからだ身を洗ってもらいながら、
火星を想っている。
隔たった火星を想っている。

「幻の惑星ネム」

懂れている場所がある。

地球の周りを人工衛星の軌道に乗って回り続けていると云う、記録には残っていない幻の惑星ネム。

世界中の仲間はずれが集まって造った眠るための惑星。

惑星ネム完成後、

当時の地球のアウトローたちは、

みんなそこに旅立ち、眠りに就いた。

アウトローたちを追い出したマジョリティーは、

惑星ネム関連の記録をすべて抹消し、
アウトローたちを追い出したことを祝って、連日連夜どんちゃん騒ぎをした。
こうして地球は、ますます不夜城と化した。

時は流れ、記憶も薄れたが、

伝承だけはかろうじていまでも残っている。

地球の人工衛星軌道に、いまでも惑星ネムはあるのだと。

仲間はずれのアウトローたちの眠りを乗せて、回り続けているのだと。

懂れている場所がある。

幻の惑星ネム。

世界中の仲間はずれが集まって造った眠るための惑星。

「艶^{つや}ばあちゃんの死」

やっぱり100歳にもなると、お葬式もそこまでしんみりムードぢやなくて

それにしても、

焼き場の扉！

なんとゆっくり

なんと誘うように

閉まることか！

わたしのたましいまで

焼き場に吸い込まれそうになる。

[むらさきいろ]

6月はむらさきの月。

艶つやばあちゃんを偲つやばせるむらさきの月。

艶つやばあちゃんが100歳で逝つやったあと、

今年もむらさきの月が巡つやってきた。

艶つやばあちゃんの不在など、

知らぬ気な顔で恙つやなく。

それゆえくつきりと、わたしに

亡つやきひとを思い出させて。

わたしたちはちょうど還暦分の年の差で、

けれども艶つやばあちゃんは、

『神童だけと変わり者』とされた幼いわたしの唯一の理解者で、
だからこそ、わたしたちは大親友だった。

艶つやばあちゃんは娘時代の殆つやどを

戦時下の台湾で過つやごし、戦後引揚船で帰つやってきた。

台湾生まれの妹が、日本で初めて雪を見て、

「わあ、お米が降つやってきた！」

とはしゃいだ話を何度も語つやってくれた。

艶つやばあちゃんは亡つやくなった。

むらさきの月は命日ではないが、

繰り返し繰り返し、思い出を再生する。

こんな想い方があってもいいはずだ。
季節外れのクリスマスソングのような。

「江戸っ子」

おとうとは江戸っ子だと思

生粋の北九州っ子で

ばりばり北九州弁を遣う

まず

おとうとは『ひ』と『し』の区別かつかない

「逢っていなかったあいだ、君、何処かに行った？」
と訊くと

「横浜に『ヒョウ』を観に行った」
と云う

『ヒョウ』……豹かな？ 横浜まで？

何度訊いてもおとうとは繰り返す

「『ヒョウ』よ、『ヒョウ』！」

わたしは唐突に思い出す

おとうとは『ひ』と『し』の区別かつかないことを

「『シヨウ』？」

と尋ねてみると うれしそうに首肯うなずく

「うん、『ヒョウ』!!」

それから もっと云うなら

『江戸の町人』みたい

たいへんに文化的

歌舞伎もよく見に行っているし 寄席や銭湯も好き
映画や建築も好き

姉のわたしがすぐに自分で創り手にまわりたがるのに対し
おとうとは徹底的に消費する側

『江戸の町人』だゆえんと思う所以だ

おとうとは映写技師をしている

もともと奈良の大学に通っていた頃

東京の映画館で映画の学校のチラシを見つけたわたしが おとうとにチラシを送った
のがきっかけ

おとうとは毎週末奈良から東京に通い 大学卒業後映写技師になった

そうして いまも映画館ではたらいっている

「まだわたしにも」

どうしよう気づいちゃったよこのキモチ
わたしに恋が残ってたとは

「奪われた」

あざやかな季節がやってきて
わたしはあなたに奪われた

「まき子が好き」

最近気がついたのだけれど、
わたしにもまだ恋が残っていたらしい。

まき子が好き。

まき子はわたしがひとり暮らしをはじめてわりとすぐから居る介助者。
8歳年上。

すごく小さくて、でもパワフル。

何よりノリがわたしと近い。

最近ふたりで気に入っている遊びが、
『やせぐれまき子の介護日誌』。

たとえば昨日はこう。

「力のない利用者が『腕相撲をしよう』と云う。捻り潰してやったぜ！」

とても愉しい。

ところがまき子、あと2年以内には引退すると云う。
正直、動揺せずにはいられない。

「サバイバー」

ハタチくらの頃

劇団の女性演出家から手を出されつづけていた。

女性演出家は40代で はじめは芝居の稽古だと云われた

「これは芝居の稽古だからね 躰触るからね」

わたしは当時酷く不安定だったこともあり

行為に厭だと云えず 女性演出家が与える快樂に流されてもいた

やっと開放されて浴室に逃げ込んだところを 追いかけてこられてふたたび……なん
てことも屢々で

いろいろな機会にいろいろなところで 散々いやらしいことをされた

関係は数年つづき

あとにはトラウマが残った

つい最近まで入浴中に 追いかけてこられたときの絶望感が生々しく蘇ったりしてい
た

それから抜け出せたのは 経験を他人に話して
こう締めくくったときだった

「あのひとは狡かったと思う」

言葉にしたことで 胸のつかえが昇華した
気がした

「忘れもの」

『忘れものはありませんか？』

少女が云う。

紳士は少し考え込む。

なんだろう……なにかあったような。

そもそもこれは誰だ？

記憶の何処かで引っかかる。

私の娘か？

いや、亡き妻の若い頃か？

『忘れものはありませんか？』

少女が繰り返す。

紳士はまたも考え込み、

そして、

唐突に思い出す。

『忘れものはありませんか？』

これは私。

幼いうちに跡取りとして男として教育された。

『忘れものはありませんか？』

だから、

妻なんてまやかしたし、

娘なんてできよう筈もない。

『忘れものはありませんか？』

少女が云う。

紳士は涙を浮かべて少女を抱きしめた。

『ただいま……』

『……おかえりなさい』

「ひとりきり」

むかしからひとりあそびがとくいで、
せかいにうまくなじめなかった

こうねんそれははったつしょうがいゆえとはんていされたのだけど
げんいんがわかったところでげんじつがわかるわけでもなく

わたしは世界にいつまでも慣れない。

たとえばすうがく

点は概念上でしか存在し得ない、と云うようなこと。

長さがあればそれは線分。

広さがあればそれは面。

それから三角形の内角の和は、

現実には180。とは云えないこと。

それらがわたしを追い詰め、
苛む。

わたしはひとりきりのせかいににげこむ。

そこでうたうことやえんじることやことはやものがたりをつむぐことをおぼえた。

けれどもそれはもろはのつるぎ。

わたしはそのなかではしあわせだけど、

よりこどくをふかめた。

でも同時に見つけたことがある。

^ひとりきりの世界からのわたしの言葉vは
おなじような^ひとりきりの誰かvに響くということ。

だからこわいけれど、
勇気を出してわたしは言葉を綴る。

これは手紙。

あとがき

わたしは昔からいろいろなことをやりたがる性質たちで、旧いところでは舞台女優としての活動や歌の活動。並行して文筆活動。

結局のところ、〈表現〉なんだろうなといまはそう思っている。でも昔はどっちつかずで中途半端で自己嫌悪に陥ることもしばしばだった。

ところで、運命はわたしから四肢の自由と声を奪った。

傍目には不幸に見える運命はわたしをサンプルにし〈自由〉にした。

目指すものは必然的に文章だけになり、わたしは運命に感謝さえした。決めきれなかった道を選んでくれたから。

そうして二度目の運命に襲われた。

拒食症と統合失調症でほんとうに死にかけた。

運命が今度くれたものは、〈覚悟〉だった。

生還して文筆業とちいさな出版社を軌道に乗せることに邁進した。その甲斐あって詩集と作品集の計8冊の本を出版することができた。

いろいろなスタイルのものを執筆した。詩、小説、戯曲、短歌。

詩に軸を置きたい！ ずいぶん遠回りしたけれど、大切なわたしの立脚点。そういう意味を込めて、第二詩集のタイトルは、『立脚点』に決めた。

編集は、前回に引きつづき、佐相憲一さんをお願いした。まだ幼いわたしの詩人人

生の指針となってくださっている方。佐相さんの編集はたいへん素晴らしく、たいへんに勉強になっている。

今回の詩集『立脚点』は、前作『水鏡』から踏襲したわたしの〈へたましい〉はそのままだまに、さらに進化したかたちのミカヅキカゲリをお届けできるのではないかと、詩人としてのわたしは、まだとても幼く、拙いが、この言葉が誰かに届くと信じてわたしは言葉を綴っている。これを立脚点として、わたしはこれからも歩んでゆこう。

さいごに、わたしの詩と云う手紙を読んでくださって、ありがとうございます御座いました。

あなたがいるからつよくなれる。



ミカヅキカゲリ

ミカヅキカゲリ

1978. 11. 01. 生まれ。北九州市出身。筑波大学で、心理学、心身障害学などを学ぶ。大学在学中から舞台に立ちはじめ、卒業後は舞台女優に。その傍ら、声優や歌うたいとしても細々と活動。しかし実は作家志望との矛盾を抱えていた。

一方で中学生の頃より、〈存在の不安〉としか形容できぬ漠とした悩みに苦しみ、ついには耐えきれず2006年末に自殺未遂。後遺症のため、四肢麻痺になり、以降車椅子生活。赤い電動車椅子と長い黒髪がトレードマーク。ちいさな頃より好きだっ

た詩作を本格的にはじめたのも大学在学中から。小説は車椅子になってから。

2018. 11. 01. 第一詩集『水鏡』刊行。

同年12月、NHK TVで「空をあきらめない詩人ミカヅキカゲリ」として特集される。

その後、ひとりきりでちいさな出版社 ♪ 三日月少女革命 ♪ を設立。

著書に『メアリー人形』、『ミカヅキカゲリ作品集Ⅰ〜Ⅲ』、『エッセイ 障害者のひとり暮らし①』、発売中。

マイブームは、和装と球体関節人形。

日本詩人クラブ会員。

■ ■ ■ † 三日月少女革命 † のススメ ■ ■ ■

† 三日月少女革命 †とは、赤い電動車椅子と長い黒髪がトレードマークのミカヅキカゲリがひとりきりで運営するちいさな出版社です。車椅子だからこそ、視える景色をお届けすることによって、自己実現だけでなく、よりやさしい、より成熟した世界を目指す、しずかな革命を志向します。

何か、善きもの、美しいもの、たったひとつの真実を掴みたいと思っています。

ちいさな出版社*† 三日月少女革命 †

<http://3kaduki.link/>

■ ■ ■ 既 刊 リ ス ト ■ ■ ■

第一詩集『水鏡』（コールサック社刊） 四六判 128ページ 1500円

小説本『メアリー人形』 B5 24ページ 特装版 1500円
廉価版 900円

『ミカヅキカゲリ作品集Ⅰ』 B6 184ページ 1800円

『ミカヅキカゲリ作品集Ⅱ』 B6 212ページ 2000円

『ミカヅキカゲリ作品集Ⅲ』 B6 132ページ 1300円

エッセイ『障害者のひとり暮らし①』 B6 52ページ 700円

†三日月少女革命†

■■■■ 奥 付 ■■■■

題 名 第二詩集 『立 脚 点』
著 者 ミカヅキカゲリ
編 集 佐相 憲一

発行日 2019年11月1日
発行元 三日月少女革命
印刷所 しまや出版

ISBN 978-4-909036-10-0
定価 1000 (税抜き) 円
URL <http://3kaduki.link/>